

平成28年度 第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議 議事概要

日 時：平成29年2月15日（水）午後2時～午後4時30分

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 平成29年度入学試験状況について

[2] 平成28年度進路状況について

[3] 平成28年度受審機関別認証評価結果について

[4] 高専4.0イニシアティブ新展開事業計画について

[5] 平成28年度年度計画実施状況について

[6] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略，順序不同〕

遠 藤 俊 郎（富山大学長）

濱 尚（富山高等専門学校技術振興会会長）

及 川 武 司（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）

金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）

高 木 繁 雄（富山商工会議所会頭）

杉 野 太加良（株式会社スギノマシン代表取締役社長）

市 川 吉 晴（立山マシン株式会社事業推進室理事）

池 田 茂（富山高等専門学校同窓会会長）

【欠席委員】

松 本 三千人（富山県立大学副学長・工学部長）

齋 藤 史 朗（富山県中学校長会会長）

大 坪 昭 一（富山県商工労働部長）
久 和 進（北陸電力株式会社代表取締役会長）

【富山高等専門学校出席者】

石 原 外 美（校長）
西 田 均（副校長）
新 開 純 子（副校長）
寺 西 恒 宣（教務主事）（本郷）
中 谷 俊 彦（教務主事）（射水）
青 山 晶 子（学生主事）（本郷）
塚 田 章（学生主事）（射水）
櫻 井 豊（寮務主事）（本郷）
梅 伸 司（寮務主事）（射水）
高 田 英 治（専攻科長）
阿 蘇 司（副専攻科長）
林 興 一（事務部長）
小 林 正 幸（総務課長）
西 野 伸 一（管理課長）
石 田 芳 邦（学務課長）
山 田 豊（学生課長）
船 崎 浩 之（総務課課長補佐）
竹 腰 貢三子（総務課課長補佐）
穴 田 さおり（総務課課長補佐）
新 木 裕 一（総務課主査）
矢 郷 允 利（総務課主査）

議 事

【石原校長説明】

[1]平成29年度入学試験状況について

○学力試験に対する出願状況によると、定員の約半数を推薦入試により入学させているので、学力試験による倍率は定員に対して2倍に近い倍率になった。

- 本校は今年の入試から併願制をやめて専願制にした。これまでは県立高校と本校の両方を受験できたが今年はお互いを選ばない形にした。これまでの併願制では入学者の予測が難しいので合格者を定員よりも多く出していた。その結果、適正な学生定員管理が困難になり、例えば今年度は40人定員のクラスで入学者が60人を超えるとといった定員超過の事態になった。また時には定員を下回ることもあった。
- 専願制に変更した理由は、このように学生定員管理が困難であったこと、そしてアドミッションポリシーに沿った、本校の求める学生を獲得するためである。
- 併願制をとっていた昨年度の志願倍率は3倍であったので、昨年度と比べると志願倍率は減っているが、専願制を採用している全国の高専の中では高い倍率であり、東海北陸地区の他高専で昨年度一番多かった高専と近い状況になった。

[2]平成28年度進路状況について

- 本科生、専攻科生ともに就職する学生の半数が県外に就職、半数が県内に就職している。
- 機械システム工学科の学生は製造業、電気は電力会社、電子は情報関係といったように、各学科の特色を生かした就職を行っている。
- 本科学生の進学は専攻科と大学があるがその割合はさほど変化がない。専攻科生は大学院修士課程への進学が増えている。

【質疑応答】

(委員)

- 進学状況の変化の理由は何があると考えるか。

(校長)

- 高専の役割の変化が関係しているように思われる。20歳で高専を卒業して技術者になるという進路と、もう少し勉強したい進路の2つのグループに分かれてきて、それだけ学生の進路が多様性のあるものに変化してきた。高専が「教育と研究は一体」としてきたことが影響していると思う。また、高専卒と大学卒では、就職した企業での扱いが異なることが関係していると思われる。

(委員)

- 県内・県外の就職の比率は「やはりそうだったか」という感があった。
- 入学者の大半が県内からだが就職は県内・県外が半々。県内にもっと目を向けてもらうようにして地元への定着を図ってほしい。これだけ教育して費用をかけているのに県外

に流出するのはもったいない。

○インターンシップ先として県内企業に目をむけてほしい。

○企業側としては理学系が弱いので理学部への進学希望の学生が増えてくるとよい。

○専攻科生の大学院進学は富山高専の売りとしてもっと出せるのではないか。

○大学院進学志向が増えてきていることをどう捉えていけばよいのか。

(校長)

○大学編入を進路の一つと捉えている学生が多いということの表れであろう。大学と同様の待遇でないということ、そしてもう少し勉強したい、前向きな学生が増えてきたということが考えられる。学会等で発表する機会が増えてきて、更に研究を進めたいという思いを持つ学生がいるのではないかと考える。

(委員)

○入口における傾向として何があるか。

(校長)

○入口は県内が多い。国際ビジネス学科は最近県外からも増えてきている。商船学科は、もともと全国からきている。質の高い学生は入学当初から大学編入を念頭においている。

(委員)

○これだけ就職で県外へ学生が流出している状況があつて県内企業は何をすればよいのか、その方策が見えてくるようである。

○学生の向学心が強くなってきた。またそれだけ環境が良くなっているということが考えられるようだ。

○大学院に進む学生が増加してきていることは評価できる。

○専願制にしても2倍の倍率を得られたというのは評価できる。

○中学生が将来を考える上で高専への進路を選択するかどうかを考えると、大学院への進学率が高いこと、なおかつ有名大学へ進学しているということは魅力である。だが、就職よりも進学が増えてきているということで地元企業の置かれた立場は難しいところでもある。

【石原校長説明】

[3]平成28年度受審機関別認証評価結果について

○7年に1度、大学改革支援・学位授与機構からの機関別認証評価を受けている。昨年10月

に訪問調査が行われた。それを経て、1月終わりに本校の評価結果が届いた。富山高専は基準を満たしているという評価を受けた。

○就職率、進学率ともに高いと評価を受けた。また、海外学術交流協定校と数々の取組みを行っている点、社会に対するサービスとして企業教育、企業人セミナーの実施をしたことについて高い評価を受けた。

○外部資金としては1億円を獲得している。共同研究で2千万円程度。受託研究は3千万円程度。科研費は35件、5千万円程度獲得していて、学校としてはいろいろと工夫している。

[4]高専4.0イニシアティブ新展開事業計画について

○「高等専門学校の充実について」「日本再興戦略」といった提言が政府から出され、これを受けて高等専門学校をもっと後押ししようという動きが文部科学省から出ている。こうした経緯を経て「高専4.0イニシアティブ」という計画を立てて、高専を応援しようという取組みが始まる。各高専の特色を出して2年間支援しますということである。

○3月末までに委員会で全国高専の中から支援する事業を選別することになっている。

○第3期中期計画期間は平成30年度まで。高専4.0イニシアティブは第4期中期計画期間になげるための活動経費を支援するという趣旨のもの。本校からは「地域への貢献」と「国際化の加速・推進」の2つの方向性の事業計画を出した。

○「地域産業を支える創造的で高度な実践的人材の育成」事業は、本校、技術振興会、機電工業会、富山県、富山市、海外協定校と連携した取組みを計画した。学科の垣根を飛び越えて取組み、学校で閉じてしまうのではなく企業等との連携をとりながら人材を育成していきたい。機関別認証評価において地域との結びつきが強いという評価を受けたこともあり、地域連携による取組みを計画した。

○「地域産業・企業の国際展開を支える高度な実践的人材の育成」事業は、海外インターンシップ、国際セミナーを開催し、国際展開に貢献できる人材育成を進める事業である。

【質疑応答】

(委員)

○今回の機関別認証評価の他にはどのような評価があるのか。

(校長)

○工学系では国際的技術者養成教育プログラムであるかどうかを評価するJABEE審査、商船系ではSTCWという国際的船員を育てる視点での評価がある。

これら専門分野の評価と異なり、機関別認証評価は全体を網羅した評価である。

(委員)

- 国は、質の保証として最低基準のもので設置基準を設け審査が行われている。最近ではフォローアップをしてそのフォローアップにおいて審査を厳しくしている傾向である。今回の機関別認証評価では、富山高専は高い評価を受けており、頑張っているという姿が見えて素晴らしい。
- 機関別認証評価で指摘のあった自己点検評価については運営諮問会議で何か対応が必要か。

(校長)

- 運営諮問会議においてはこれまで年度計画に関する事項の評価をいただいていた。次回以降の運営諮問会議では、年度計画に関する事項の結果に加えて自己点検評価の結果を委員にお示ししたい。

(委員)

- 「高専4.0イニシアティブ」を実施することで他の高専よりもいろいろと可能性が広がり、他の高専との差別化ができる制度と思う。ぜひ頑張ってもらい有意義に使って地元富山を光り輝かせてほしい。
- 年間75人の学生の海外派遣をしているということは、高専在校中に全体の3割が海外を経験することとなり、富山高専の大きな強みである。意外と知られていないことだ。学校側でここまでやっていれば企業は歓迎する。就職への期待にもつながる。
- 海外との実績についての宣伝が足りない。まだ世間に知られていない。
- 海外の至るところに富山県人会がある。富山県国際課を通してこうした組織との繋がりを作っていくとよい。また、現地では大使館が中心となって交流している。高専だけのネットワークだけではなく他のネットワークを利用できればよい。高専が思うほど世間は知られていない。いろいろとネットワークを活用してほしい。
- 全国の高専の中で富山高専は工業系だけではなく文系、商船系を持っていることが特色と思う。この特色を高専機構の中でも前面に出して予算獲得をしてほしい。
- アメリカの大統領が変わり日本の経済の有り方が大きく変わる時がくる。その変化に対応して方向転換していかなくてはならないと考える。「ものづくり」と「研究開発」、「ケミカル」と「サイエンス」、この二つを組み入れたものを取り入れていくことが必要だろう。富山は最先端のものを少し取り入れていくようにすること、これは難しいことだ

がやっついていかななくてはならない。ものごとの形態が数年後に大きく変わっていくだろうという変化に対して高専は学生に何を教育して社会に送り出すか、それを根底から見直していく必要がある。今までやってきたことの延長では難しくなっていくだろう。

○このままでは時間を無駄に使うことになる。何をするか、それは「基礎」だと思ふ。「基礎教育」を学生にすることが将来の日本に非常に影響していくことになるだろう。時間と人、お金をかけてその卵を産むのが高専生という考えをもってやっついていく必要があるだろう。いろいろと方策を考えていく必要があるだろう。

○これから技術者を育てるにはプロフェッショナルを育てることになる。高専生は15歳からという重要な時期に学ばせることになる。この時期にどういう教育をするのかということを見ると高専は非常によい環境と思われる。

(校長)

○「ケミカル」と「サイエンス」という従来の異質のものをどう組み合わせしていくのか。これは、新しいものを生み出していく可能性があるのも両方が分かる人材をどう育てていくのかということが必要になる。学生には自分で調べたりする体験をさせたい。学校だけではできないので企業、大学等と共同で知的財産を上手く活用していく仕組みを作っていくことが大事だと思う。

○海外はタイ、マレーシア、ハンガリー、北アイルランドに派遣している。現在は1か月程度だが、今後は3か月に延ばすことも進めていきたい。地元企業の海外工場への派遣も行っている。

(委員)

○数学の線形代数や電磁気といった、基礎の部分をしっかりとして教育してほしい。

○本科と専攻科の専攻分野をクロスすることはあるのか。最近横のフィールドで異なる領域を学ばせる機会をつくるということも行っている。こうした点も考えていくのも一つだろう。

[5] 平成28年度年度計画実施状況について

【石原校長説明】

○第3期中期計画期間における計画、それに対する今年度の計画、その実施状況をまとめた資料で、その評価をお願いしたい。

(委員)

○各項目を総合評価、総合判断をしていくことになるだろう。日本の将来像を考えた中で議論した総合的なものの見方で判断していく。

○今後は「特に注目すべき事項」を加えて5段階評価をしていくことも検討してほしい。

(議長)

○高専の強みは全国統一の独立行政組織であることである。これは、国立大学や公立大学との違いである。この強みを活かしてもらいたい。この中期計画期間は平成30年度までである。今後の推進を期待する。

(石原校長)

○高専は大学と異なるキャリアを身につける教育体制として中学校卒業後に入学して5年間で技術者養成をするというのがこれまでの役割だった。制度ができて50年経った今果たしてこれでよいのかということが問われている。皆様の意見を取り入れ反映させていき本校の活動が活発になるよう取り組んでまいりたい。

[閉会 午後 4時30分]